

家族・ライフスタイルの変容と「住まい方」の選択

—コレクティブハウジングを中心に—

“Collective Housing”; a new housing style of harmonizing with work, family and community life

高橋桂子・杉本千明

Keiko TAKAHASHI, Chiaki SUGIMOTO

1	はじめに	307
2	家族規模とライフスタイルの変容	308
3	コレクティブハウジングの事例	311
4	「住まい方」を選択する時代：仕事，家族，コミュニティの調和	316

1 はじめに

家族規模の縮小化，有配偶女性の雇用労働者化や生活様式の多様化など，日常生活のあり方は大きく変化している。生活を支援する基盤である地域力も低下し，世代間・世代内の交流もあまりみられない。このようなとき，家族の重要な機能である家事・育児や介護をすべて少数の家族員が担うことは肉体的にも精神的にも厳しい。確かに，家事の多くは外部化され金銭で解決することも可能であるが，子や高齢者といった被育児（介護）者の立場・視点を考慮に入れたとき，大手をふって外部サービスを購入することに抵抗を感じざるを得ない場合も少なくない。同時に，我々は人と人とのつながりなしには豊かな人間性を形成し，豊かな人生を送ることはできない。個人主義が謳われている今日，「個」を重視すればするほど「共生」の要素が必要となる。住まいにおいて近年，「長屋的な付き合い」という言葉が頻繁に登場するようになったのはこれら理由からであろう。

このような中，家族や世帯の定義が変わりつつある。従来血縁を前提とした家族だけでなく，居住に関わるネットワークの地縁，個々人の意思で選択する選択縁などによる新たな「家族」が形成されている。そして現実にはすでにこの新たな「家族」ネットワークで，日常生活の器である住宅との関係，具体的には住まい方や住宅の捉え方を見直し，「共生」することにより家事・育児や介護を乗り越え，豊かに暮らそうとする動きがある。たとえば，2003（平成15）年6月，東京都東目暮里（荒川区）にオープンした多世代共生型賃貸マンション「コレクティブハウスかんかん森」（以下，「かんかん森」と略記）がある。コレクティブハウジングとは，「個人の自由や自立した生活を前提にしながら，日常生活の一部の共同化・空間や設備の共有化によって，個人や小さな家族だけでは充足することのできない，合理的で便利で楽しみと安心感の

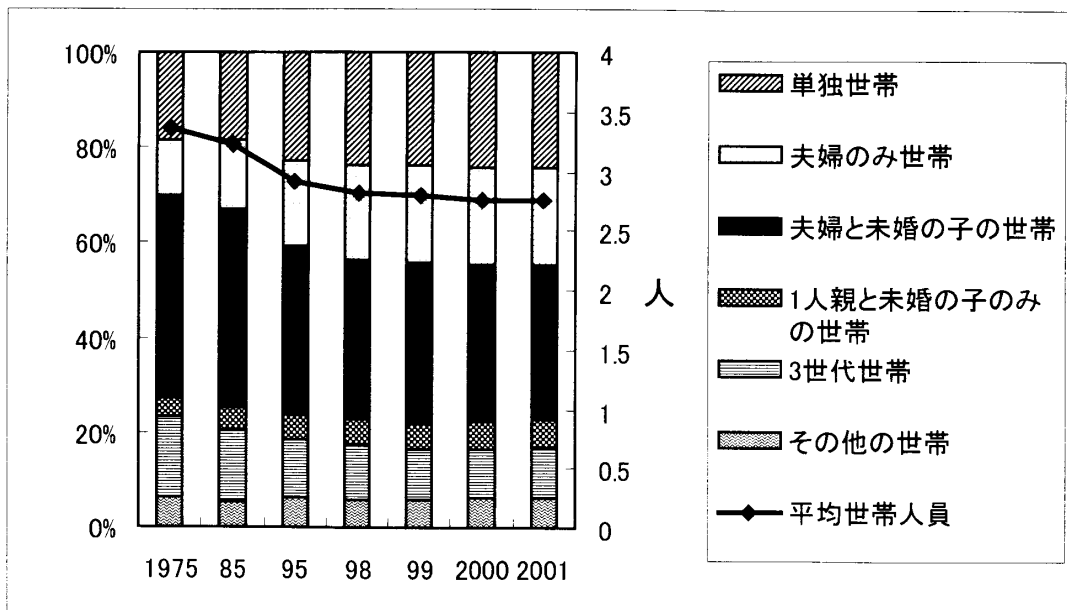
ある住まい方」(小谷部(1997)など)と定義される。「いつも我が子を見守ってくれる皆の眼がある」, 「子が学校から帰ったとき, お帰りといってくれる」や「同じフロアの, 時々食事を一緒にとる顔見知りの高齢者に, 共用スペースの広いリビングで, 勝手に遊んでいるわが子を見守ってもらえそう」などから入居を決めた若夫婦もいる。また, 少子化の進展に伴い, 高齢期における居住用不動産の活用=リバースモーゲージを通して, 住宅を資産というストックから日常資金というフローに逆転換させる仕組みも再び注目を集めている。

本稿は, コレクティブハウジングを中心に有職有配偶女性の視点から住まい方の選択について考察を加える。構成は次のようである。続く第2節では統計調査を用いて家族やライフスタイルの変容を確認する。第3節で「コレクティブハウジング」の概要や具体事例の考察を通じて住まい選択の参考とし, 第4節で考察を行い, 最後にまとめを行う。

2 家族規模とライフスタイルの変容

1) 家族形態・家族規模

① 縮小する家族



(注) 左軸：家族構成割合, 右軸：平均世帯人員

(出典) 総務省統計局「平成13年国民生活基礎調査」より作成。

図1 世帯構造及び平均世帯人員の推移

2001年の平均世帯人員は2.75人と, 戦後一貫して低下傾向にある。また, 単独世帯, 夫婦のみ世帯の増加も注目される。

② 家事時間

共働き世帯における1日の家事関連時間は夫25分, 妻4時間12分と, 圧倒的に女性に家事負担が偏っており, 有職有配偶女性は仕事も家事もという「二重の負担」を強いられている。

表1 共働き夫婦の仕事時間一週全体

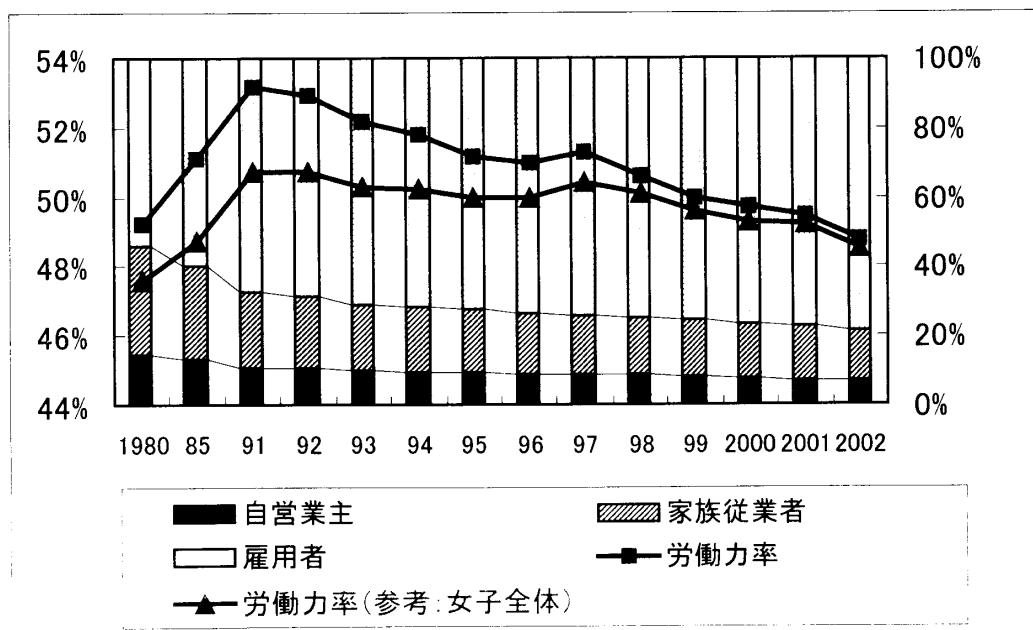
	夫	妻
2次活動	8.10	9.05
通勤・通学	0.44	0.25
仕事	7.01	4.29
家事関連時間	0.25	4.12

(出典) 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査」より作成。

(2) 有配偶女性労働力とライフコース

① 労働力率

日本の女性の労働力率は長期的に上昇傾向にある。25～29歳層と45～49歳層を左右のピークとし、30～34歳層をボトムとするM字カーブは近年、よりなだらかなものになりつつある。有配偶女性に限定した場合、その労働力率は1991年の53.2%をピークに低下し、2002年では48.8%に低下しているものの、女性全体より労働力率は高い。また、有配偶女性の8割は雇用労働者として勤務している。

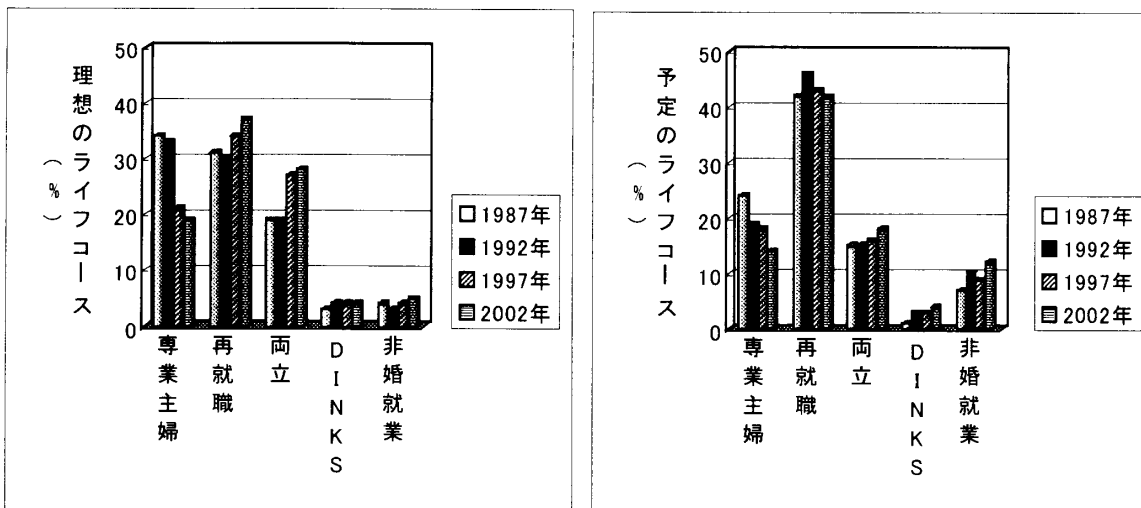


(注) 左軸：労働力率，労働力率（女子全体），右軸：「従業上の地位」の構成比
 (出典) 総務省統計局「労働力調査」より作成。

図2 有配偶女性の労働力率ならびに従業上の地位の推移

② ライフコースの選択

未婚女性（18～34歳）が理想と考えるライフコースは、「専業主婦」コースから「再就職」「両立」コースへとシフトしている。また、約7割の未婚女性が結婚後も働くことを望み（「再就職」＋「両立」＋「DINKS」コース）、かつ、「再就職」と「両立」でその差は10%にも満たないものの、実際に実現しそうなライフコース（予定のライフコース）となると圧倒的に「再就職」をあげる割合が高い。多くの未婚女性が結婚や出産を機に一度は労働市場から退職せざるをえない状況を予期していることがわかる。



(注) 「専業主婦」＝結婚し子どもを持ち、結婚もしくは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない。「再就職」＝結婚し子どもを持つが、結婚もしくは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ。「両立」＝結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける。「DINKS」＝結婚するが子どもを持たず、仕事を一生続ける。「非婚就業」＝結婚せず、仕事を一生続ける。
 (出典) 国立社会保障・人口問題研究所HP。

図3 未婚女性の理想のライフコース (左図) と予定のライフコース (右図)

(3) 「拡大する家族」という新しい選択

家族規模が縮小化し、有配偶女性の雇用労働者化が進展している今日、血縁によらない地域や人とのつながりの中で子育てを協力し合うなど、共に住まうことを選択し、その価値観を共有している人々がいる。また一方で、血縁による家族では世帯間や家族間の距離を設けつつ、従来よりもゆるやかな関係で「家族」を築こうとしている人々もいる。このように有職有配偶女性の間では血縁・非血縁に関わらず、自分の必要な人を選択し、主体的に個を繋ぎ、居住に関わる新たなネットワークによって、新しい「家族」形態を形成している動きがある。篠原(2001)らの研究では、この新たな家族を「拡大する家族」と称し、さらに「契約する家族」「ゆるやかな血縁家族」「仲間家族」と「協同する家族」に4分類している。「契約する家族」とは、家族以外の第三者である外部サービスの利用により家族の役割を一部軽減している家族である。また、「ゆるやかな血縁家族」はこの中で唯一血縁のつながりよる家族であり、「仲間家族」と「協同する家族」は、同じ価値観や境遇の人との相互扶助している家族である。

表2 「拡大する家族」の概要

タイプ	具 体 例	特 徴
契約する家族	生活支援サービス(育児介護)、地域ネットワーク(地域通過)	必要な生活支援サービスを媒体に集まった人々。
ゆるやかな血縁家族	修正直系家族：2世帯住宅、複合家族：多世帯住宅、再構成家族	血縁を軸としながらも「家制度」に基づかない自由な結びつき。
仲間家族	ルームシェア、疑似家族、隣人としての仲間家族	経済的な繋がりを軸に生活基盤を共有し、次第に精神的な繋がりが生まれる。
協同する家族	コレクティブハウジング、コープラティブハウジング	より豊かで快適な生活・住環境を求めて積極的に「家族」を形成している。

(出典) 篠原(2002)より作成。

ここで注目するのはそれぞれの価値観に基づく選択をした「協同する家族」である。各々の自立を前提にしたうえで、それぞれのライフスタイルを実現させるために一定範囲内において積極的に関わりあう「家族」である。その中でもコレクティブハウジングは、暮らしを独立した自分の住居内だけでなく、共有スペースまたはその居住地のコミュニティをも含めて住まいと捉え、生活の一部を隣人と共同化する住まい方である。長屋的な近所付き合いのように相互扶助のあるコミュニティが形成されるが、本来の目的は助け合いではなく、個人が求める自立した、より自由な生活を実現することである。

次章以降、コレクティブハウジングの具体的な事例の紹介し、有職有配偶女性の視点からコレクティブハウジングのニーズについて述べる。

3 コレクティブハウジングの事例

(1) コレクティブハウジングの概要

コレクティブハウジングとは、独立した住戸と食堂やリビングなどの共用スペースが組み込まれた集合住宅であり、そこで住民が生活の一部をシェアする住まい方のことである。一般的に、集合住宅の共用室と言うと、集会有る時のみ使用するような場所であると認識されがちであるが、コレクティブハウジングでは共用スペースは独立した住戸の延長として捉えられ、日常的に住民が生活する場となっている。居住スペースは「自分の住戸+共用スペース」となり、より広いスペースを得ることができる。また、協同生活でメインとなるものは食堂での夕食とその準備である。共食（コモンミール）はコミュニケーション形成の大きな一要素となり、生きるために栄養摂取するだけでなく楽しさや幸せを追求できる時間であるため、コレクティブハウジングの中心的な活動となっている。ここでの暮らしは一般的な集合住宅と比較し、住民同士の対面性が高く、日常的に多様な人との関係を高めることができる。総じて、安心して暮らせる住まいと人間関係というようにハードとソフトが組み込まれた生活の場であると言える。

歴史的に見るとコレクティブハウジングは、「女性の家事労働からの解放、生活の合理化」をテーマにした20世紀初頭のスウェーデンにおける集合住宅建設に起源をもつ。共同保育、セントラルキッチンや家事サービス付きサービスモデル（=クラシック・コレクティブ）などの特徴がある。現代的な意味でのコレクティブハウジングは、1970年以降、北欧で取り組まれている居住者による自主運営、自主管理のセルフワークモデルの流れにある。スウェーデン、デンマークやオランダでは80年代、公共住宅の1つのタイプとして定着した。また、アメリカでは1980年代後半にデンマークの事例紹介をきっかけにコレクティブハウジングが広がり始めた。日本では、阪神大震災の高齢者向け公的復興住宅である「ふれあい住宅」にこの考えが取り入れられ2003年6月には本格的な多世代共生型賃貸コレクティブハウジング・かかん森が初めて登場し、新しい暮らしが始まっている。

(2) 海外事例：ユストロブ・サウプェアゲス（デンマーク）

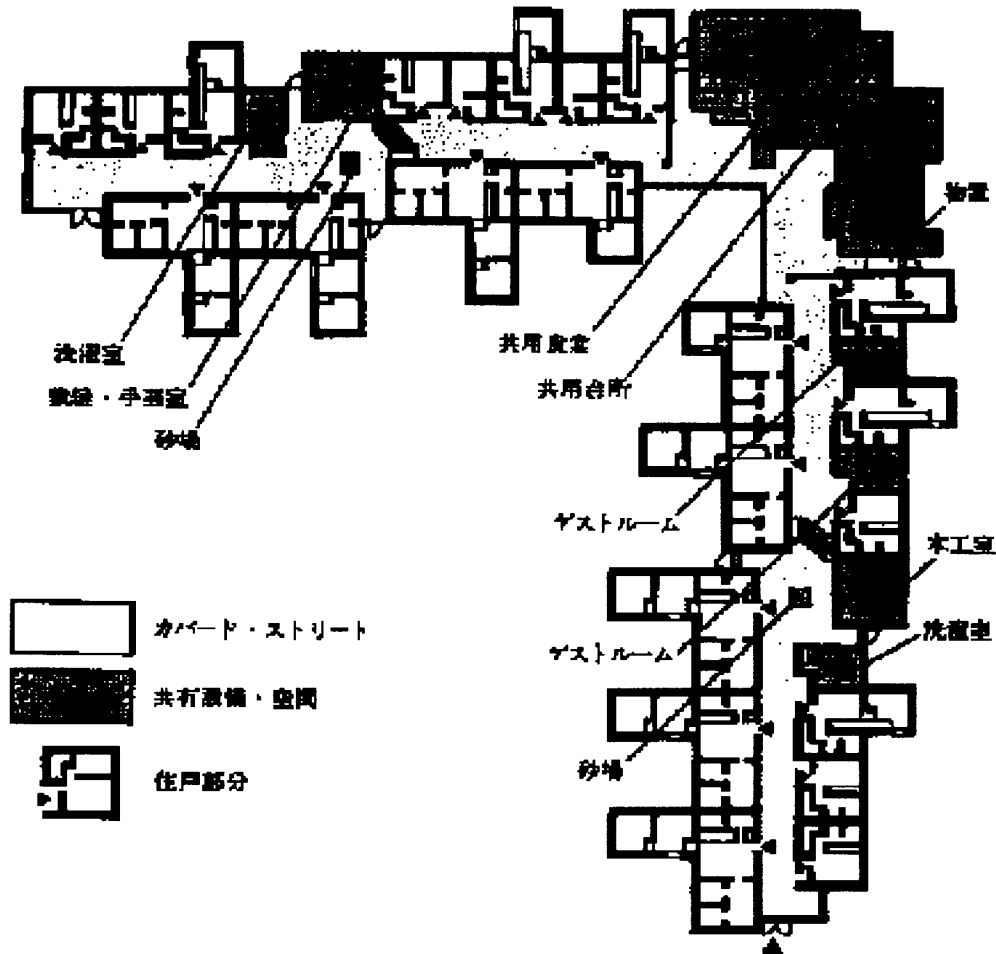
共働きやシングル・ペアレントを中心とし、子育て環境を重視したコレクティブハウス「ユストロブ・サウプェアゲス」の概要をみていこう。

総住戸数は21戸（68～98㎡）、住戸タイプは2～3DKである。共用スペースはガラスで覆われた「カバード・ストリート」とL字型に配列された住戸のカナメ部分に共同食堂、台所、ゲストルームやホビールームがある。屋外には広い遊び場もあるため、子を持つ家庭にとっては空間的に優れた環境である。そして、個人所有が難しい本格的な道具がそろった裁縫・手芸室や木工室なども用意されているため、大人が自分の趣味を思う存分満喫できる環境でもある。

月～金曜日、居住者は食事を共にする。調理は当番制で、子どもも12歳くらいになると食事当番に参加する。協同生活の管理運営を行うために、アクティビティ・グループ（理事会、財政、台所、清掃、文化や庭）が形成され、居住者はどれかのグループに参加して活動する。

「ユストロブ・サウプェアゲス」の居住者評価は、「子育ての環境としてすばらしい住宅である。広い遊び場、雨の日などでも遊ぶことができるカバード・ストリートといった物理的豊かさとともに、共同で食事をすることによって生まれる人間性豊かな環境がよい」、「安心して住むことができる。家事や子どもに煩わ

されることなく仕事や趣味、他の居住者とゆったりお茶を飲みながら話ができる」、「家の管理を一人ですることの煩わしさからの開放と適度な人のぬくもりや安心感がよい」などがあげられている。



(出典) 岸本・鈴木 (1996)

図4 ユストロブ・サブヘアゲスの平面図

(3) 国内事例：コレクティブハウスかんかん森 (日暮里)

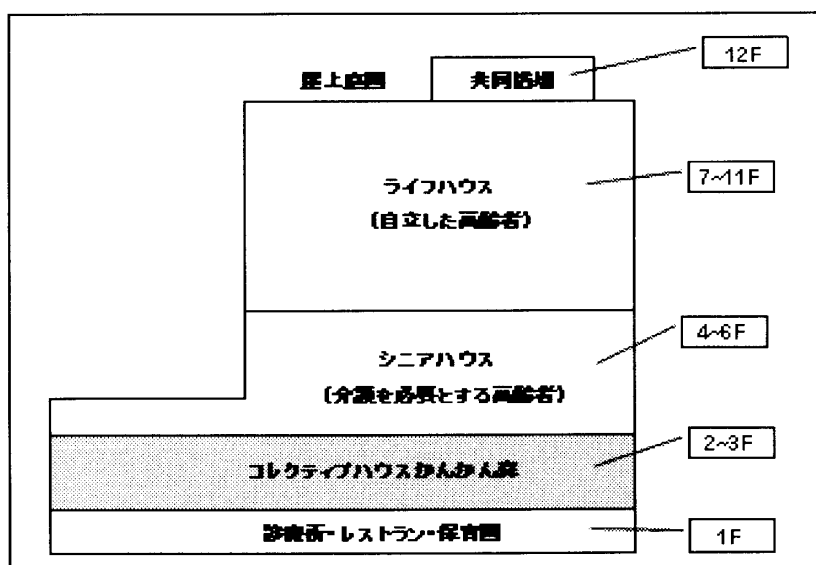
かんかん森は「日暮里コミュニティハウス」の一部に実現し、2003年6月に入居が開始した。事業主体は株式会社生活科学運営¹、かんかん森の入居者コーディネーターとして、NPOコレクティブハウジング社 (以下、CHC)²が企画・計画および運営支援を行う役割を担っている。

日暮里コミュニティハウスの1階は、地域に開放されるレストランや0～2歳児の保育所、訪問介護、医療ステーション、2～3階がかんかん森、4～6階は介護が必要な方のための「シニアハウス」(46戸)、7～11階は自立した高齢者の方を対象にした一般の住まいの「ライフハウス」(44戸)、12階には大浴場がある。

コレクティブハウスかんかん森の居住者居住者は、程度の差こそあるものの、住まいや自分の人生に積極的に向き合い、住まいの「質」を考慮し、コレクティブハウジングでの生き方を主体的に選択した人々である。2003年9月にヒアリング調査を実施したので、あわせて報告する。

¹ 有料老人ホーム、高齢者および多世代型住宅など全国18棟の「ハウス」を企画・運営。地域に開かれた「ハウス」を核とするまちづくり・地域コミュニティづくりなど。代表取締役は高橋英典。

² 人と人、人と社会、人と自然の共生を目指した生活者主体の住まいづくり、コミュニティづくりとしてコレクティブハウジングの普及、推進に取り組む特定非営利活動法人。



(出典) コレクティブハウスかんかん森HPより作成。

図5 日暮里コミュニティハウスの内訳

① 住戸の概要と入居までの経緯

総住戸数28戸(25~63㎡)、賃料7.4~7.5万円(共有部分の賃料を含む)の賃貸コレクティブハウジングである。入居2年前から居住予定者が居住者組合「森の風」を結成し、住まいづくりに取り組んだ。そこでは「共有スペースに何が必要か」「食事づくりは週に何回のペースで行うか」「家賃はいくらか」などに関して幾度も話し合われる。その過程で居住希望者同士が知り合い、共に住む仲間としての関係が生まれた。

しかし一方で、ワークショップや「森の風」に参加していた人の中には途中脱退した人々も何人もいる。彼らの共通した大きな理由は、「家賃は周辺の相場であるが、決してアフォードブルではない」「かんかん森は居住希望者が計画段階から企画に参加しているが、これには多くの時間とエネルギーが必要となる」などといった経済的・時間的なことである。その他、「一緒に住む家族が居住に同意しなかった」「コレクティブハウジングをライフハウスと誤解をしていた」などである。後者の自立した高齢者の方を対象にした居室と誤解をしていた参加者は居住者間での共有や協同生活は極力ない方がよいと発言し、他の居住希望者との意識の違いを感じたため、誤解が解けた段階で脱退したようである(嶋崎(2002))。

入居前にはかんかん森入居予定者3人、CHC会員8名、計11名の20~30代の女性がスウェーデン・コレクティブハウジングツアーを行った。8日間の滞在で8ヶ所のコレクティブハウスを訪問し、実生活を体験している。2003年9月現在、全19世帯・3~78歳が入居している。現在は月に2~3回、説明会や見学会を開催し、残り9世帯への入居者を募集している。

② 協同生活

「コモンミール」と呼ぶ共食は週3回である。食事準備は当番制(2人)、盛り付けは各自が行う。夕食時間は夜7時であるが、事前に連絡すれば取り置きもできる。食事当番は月1回のためか、あまり負担は感じていないようであった。キッチンには業務用コンビオーブンやハイカロリーのガスレンジといった最新設備も導入され、時間・労力の短縮に配慮されていた。

ヒアリング調査日は20代と50代の女性2人が食事準備を担当し、互いの知恵を出し合い、楽しく会話をしながら準備が進んだ。食事開始時間に近づくと、少しずつ居住者が集まり、各自のペースで食事が始まる。リビングにある新聞を読んだり、テラスに出て会話をしたりと、共有スペースでは各自が思い思いに時間を過ごす姿があった。大学生の男性が当番のときに料理を初めてつくった、定年退職をした60代の男性が「今

まで家事を手伝っていなかったが、かかん森では当番の時にみんなの分の食器を洗っている」など、自由で自立した暮らしの背景には平等という暮らしの約束を果たすため、居住者は自分のできる範囲での努力をしている。また、雇用労働者である母親の希望により母娘二人で入居した高校生の女の子は、当初入居に対して不満に感じていたものの、今日ではコモンミールが休みの時には残念がる様子を見せているというだ。協同生活のルールには、「互いの住戸間を行き来しないこと」とあり、「つかずはなれず」の、ある程度の距離を持ちながらプライバシーを確保している。

なお、調査日の献立は、ゴーヤチャンプル、モロヘイヤスープ、大豆の煮物、ご飯であった。

2003	(日)	(月)	(火)
2R-1	8月31日	9月1日	9月2日
2R-2	寺田	木村	杉坂
2R-3	相木	寺田(小)	栗木・青藤(小)
2R-4	寺田(小)	井上(小)	萩原
2R-5	寺田(小)	寺田(小)	

(出典) 杉本撮影。

図6 コモンミールのローテーション表

③ 「協同する家族」への期待(入居理由)

有職有配偶女性である20代の居住者は、「共働きの予定だが、子どもを鍵っ子にはしたくない。かかん森では将来安心して子どもを遊ばせることができ、子ども自身が人間性を豊かに磨くことのできる」と子育て環境として期待をしている。50代の女性は、「女性の自立を可能にする住まい方だと思う。家族との良い関係と自己実現を助ける仕掛けで、女がどんどん自立して自由に生きてほしい」と結婚や子育てで自己との戦いをした経験を通じて述べている(朝日新聞2002年1月5日付)。全体的には女性は自立しながらも豊かなコミュニケーションを育むことを、50代、60代の男性は自立した暮らしの中で自分らしい人生を送ることを期待している。

これまでの居住歴についてヒアリングをしたほとんどの居住者が、両親や本人の転勤等を理由に幾度もの転居を経験していた。20代後半の男性は、これまで地縁というものを築き上げる程、一箇所長く住んだことがなく、「生まれ育った故郷という居場所がない」と話した。そして、自分の子どもにはそのような思いをさせたくないと考え、かかん森での暮らしを選択した。他方で、転勤族として過ごしてきた60代夫婦は11箇所目の住まいとしてかかん森を選んだ。社宅を移り住んだ豊富な経験によって、「(高齢の現在でも: 筆者注)かかん森への暮らしにも気軽に飛び込むことができた」と話し、現時点ではかかん森での暮らしに満足気であった。しかし、かかん森は将来の老人ホームに入居するまでの仮の住まいと捉えており、気に入らないことがあれば引っ越すことも考えていた。このように、世代によりコレクティブハウジングに期待することは異なる。

(4) 有職有配偶女性の視点によるコレクティブハウジングのニーズ

少子高齢社会の到来の中、長引く日本経済の不況の影響を受け、将来への不安が募っている。家庭の経済

的な不安を抱えながらも、社会での自己実現を図ることを望む女性たち。有配偶女性の雇用労働者としての就労が一般化したものの、家族形態の小規模化のため両親のサポート等によって家庭機能を果たすことは難しい。有職有配偶女性は家事と仕事の2重の負担を抱えている。さらに、身近に頼る人がいない場合子育てや介護と仕事を両立するには、外部サポートに頼らざるを得ない状況に立たされる。

このような中、自分らしさや自分が望む暮らしを満足に実現することはそう簡単ではない。自己実現を図るだけでなく、家族との暮らしも大切にしたいと望む時、身近な人と人とのつながりの中で共生することにより得られる精神的時間的な豊かさが必要となる。これは、決して匿名性の高い地域ではなく、わずらわしいと感じない顔見知りの住民同士のゆるやかなつながりの中で得られるものである。この条件を満たすコレクティブハウジングこそが家庭機能を確かなものにでき、これをライフステージの変化に応じて選択することにより、有職有配偶女性は自分らしい暮らしを実現することができるのではないかと捉える。さらに、これは個人の生き方の選択へともつながる。

以下に、有職有配偶女性の視点でコレクティブハウジングの主な利点を述べる。

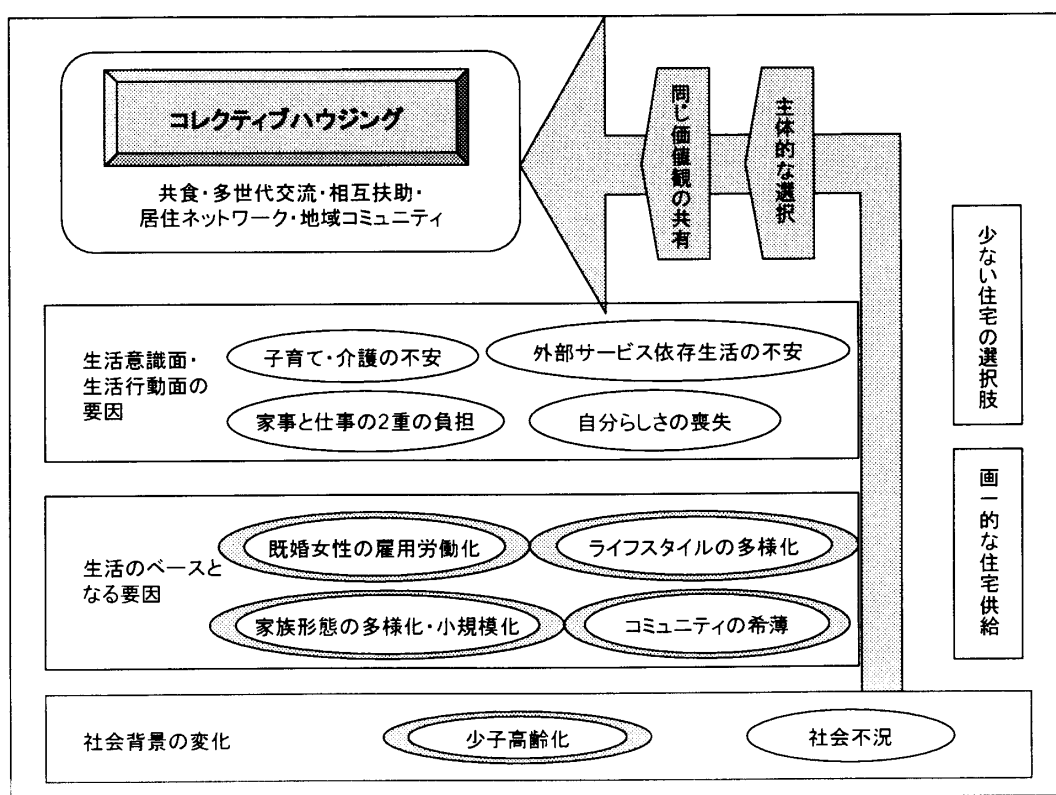


図7 有配偶女性の視点によるコレクティブハウジングのニーズ

① 合理化した豊かな時間（共食）

夕食の共同することで、月に一度程食事当番を担当すれば、他の日は食事作りから解放され、その時間を別なことに使うことができる。通常、このような時間を作ろうとすると外食や中食に頼ることになるが、そうではなく身近にいる人が自分たちのために作ってくれたものを食べ、それぞれの家庭の味を楽しむことができる。日常の食事は栄養摂取だけでなく、家族のコミュニケーションとなり精神的な活力を奮い立たせる。この時間を彩る食べ物がコンビニ弁当ではあまりに寂しい。「コモンミールだと、いつもより（1人の時）食べる量が増える」と話す居住者もいた。

かんかん森居住者で小さな子を持つ有職有配偶女性は、入居してから変わったこととして一番に「子どもと遊ぶ時間が増えた」と話した。有職有配偶女性にとってこのような日常生活の中での時間的な余裕は、自分らしいところ豊かな暮らしを営む鍵となると思われる。

② 安心のある、豊かな子育て環境

人間は人や自然とのつながりを感じることによって、他人への共感や相手を思いやる優しい感情を育むことができる。しかし、少子化の影響により、子どもたちは年齢の異なる子どもと遊ぶ機会が少なく、子どもの遊びそのものもテレビゲームやパソコンなど、子どもと子ども、子どもと外部環境との関わりによるものが少ない。このような環境で育った子どもが将来親になった時、子どもとの接し方がわからず、子育てに大きな不安を抱くことになる。他方、有職有配偶女性が子育てにかけける時間は専業主婦より少なくならざるを得ず、子育てへの不安はさらに大きくなる。かんかん森に住む小さな男の子は、同じ居住者のおばあさんと一緒に遊び、共有空間の広いリビングやテラスを走り回っていた。コレクティブハウジングでは、共用スペースに行けば誰かがいるように子どもたちが大人の目の届く範囲で自由に時間を過ごすことができる。そして、子どもは日常的に親以外の大人と接し、多様な世代、多様な価値観を身近に感じながら育つことによって自己を形成する。つまり、コレクティブハウジングでの住まい方を通して豊かな人間性を身に付けることができる。有職有配偶女性が安心して働くには、このような豊かな子育て環境があることが非常に大切と考える。

4 「住まい方」を選択する時代：仕事、家族、コミュニティの調和

家族形態やライフスタイルが多様化し、生き方の選択肢が増えた今日、同時に住まい方の選択の幅も広がっていくのが自然であろう。しかし、住まいに関してはこの社会変化に対応しているとは言い切れない。最後に、住まい方に対する課題を取り上げ、まとめとする。

第一に、家族数の減増、ワーキングスタイルの変化などライフステージの中で様々な変容を迎えることは稀なことではなく、それぞれのステージが必要とする住まいや住まい方は異なる。ライフステージ毎に相応しいと考えられる住まいでの住まい方を柔軟に選択できるよう、その選択肢を増やすことが必要である。本稿で主に取り上げたコレクティブハウジングはこの選択肢の一つであり、これにはいくつかのライフステージにおいて必要とされる要素が含まれている。

第二に、未だわれわれは住まいを「資産」として捉える傾向が強い。多くが「住宅双六」のイメージを共有し、最終的には郊外庭付き一戸建を目指しているが、苦勞して住宅ローンを返済した頃には子は巣立ち、老夫婦が大きな家にいくつかの部屋を持って余しながら住む、といった事態は十分に予期できる。このようなとき、先に述べたように多様な選択肢の中から住まいや住まい方を選択し、住まいを「所有する」から「活用・利用する」という感覚が重要になってくるであろう。そのために、住まいの賃貸・転売市場をより充実させ、住宅環境を整備していくことが求められる。

第三に、住宅を購入するとき、広さ、間取り、価格やバリアフリーなど住宅のハード面にのみ注意をむけがちである。快適な日常生活を送ろうとした場合、影響を与える要因は自宅内の構造だけではない。有職有配偶女性が仕事・家庭と地域社会生活の調和ある暮らしを実現するには、地域の「質」・地域力も問われる。本研究では、「拡大する家族」の中で積極的にコミュニティを形成していくコレクティブハウジングを取り上げた。個別解という見方もあろうが、このような「質」を選択し、主体的に個をつなぐ姿が必要である。

家族形態やライフスタイルが多様化し、人々のライフコースの選択肢が増えた今日、ライフステージやライフコースに応じた住まい方の選択があってもいいだろう。たとえば、学生時代にシェア・ハウジングを経験し、子育て期や学童期には上でみたようなコレクティブハウジングか子の成長に応じて間取りを自由に変更可能なスケルトン・インフィル方式を採用している集合住宅で生活する。他方、高齢期は、自宅で生活しながら、生活資金の融資をうけるリバースモーゲージを活用したり、場合によっては子が巣立ちエンブティ・ネストとなった広すぎる我が家は定期借家法に基づき賃貸に出し、自分たちは買物、病院への通院や日常生活に便利な中心地の賃貸住宅に転居するという選択肢もあろう。我々は生涯、各自のライフスタイルの選択にあわせて住まいとどうつきあうのか、人や暮らし、こころを豊かにできる住まいとはどんなものか真剣に考え、自分の生き方を見つめ直す時期にきている。

※※本研究を進めるにあたり、多くの皆様にお世話になりました。ご多忙の中、アンケート調査やヒアリング調査に応じていただきましたコレクティブハウスかんかん森の皆様、関係者の皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 岸本幸臣・鈴木晃編（1996）『講座現代居住 2 家族と住居』東京大学出版会
- 小谷部育子（1997）『コレクティブハウジングの勧め』丸善
- 小谷部育子・岩村和夫・卯月盛夫・延藤安弘・中村由行（1997）『共に住むかたち』建築資料研究会
- 小谷部育子（2001）「我国におけるコレクティブハウジングの展望と課題」『住宅』2001年5月号，日本住宅協会
- 篠原聡子・大橋寿美子・小泉雅生＋ライフスタイル研究会（2002）『変わる家族と変わる住まい〈自在家族〉のための住まい論』彰国社
- 嶋崎東子（2002）「「参加」型のすまいづくりについての一考察—賃貸型コレクティブハウジングを事例として—」『家庭経済学研究 No.15』日本家政学会家庭経済学部会
- 住田昌二・藤本昌也＋日本建築士会連合参加と共生のすまいづくり部会（2002）『参加と共生のすまいづくり』学芸出版社
- 朝日新聞朝刊2002年1月5日付
- 厚生労働省『平成13年国民生活基礎調査』
- 総務省統計局『平成13年社会生活基本調査』
- 総務省統計局『労働力調査』